

松浦静山撰

皆川弘道先生墓表

—— 翻刻・読み下し・現代語訳 ——

松田
清

松浦静山撰 皆川弘道先生墓表

―翻刻・読み下し・現代語訳―

はじめに

有斐斎弘道館は昨年（二〇二〇年）、活動開始十周年を迎えました。コロナ禍のなか、今回新たな十年に向けて、ホームページを一新することになりました。この機会に、皆川淇園のパトロンであり門人であった平戸藩主松浦清（号、静山）の撰になる「皆川弘道先生墓表」の翻刻・読み下し・現代語訳を掲載いたします。

この墓碑銘は明治時代に「明経先生墓表」と題するものが、『鴻儒皆川淇園』（淇園会、明治四十一年一九〇八刊）に翻刻されました。これは現在、平戸の松浦史料博物館所蔵の松浦静山自筆「明経先生墓表銘」（文化五年八月、松浦清撰并書、絹本、一卷、四六×二二七cm）に依ったものようです。しかし、『鴻儒皆川淇園』は今や稀覯書で入手困難なうえに、この翻刻は誤植脱文が目立ちます。また、阿弥陀寺の皆川家墓地にある巨大な墓碑は今では、風化のため、碑文はほとんど読むことが出来ません。

今回、翻刻の底本としたのは、松浦史料博物館所蔵の拓本「弘道先生墓碑銘」（文化五年十一月、松浦清撰、紙本、一幅、一九八×八五cm）です。これは阿弥陀寺に建てられた「皆川弘道先生墓表」の墨痕鮮やかな拓本です。大切に軸装されています。絹本の「明経先生墓表銘」の「明経先生」を「弘道先生」に改め、若干文字の異同があるほかは、同文です。有斐斎弘道館のロゴマーク「弘道館」はこの絹本からの集字を元としています。

有斐斎弘道館では五年前から、近世京都学会と連携して、毎月一回開催の「淇園を読む」会において、皆川淇園の著作を抄読してきましたが、その第一回（二〇一六年五月一日）で、「明経先生墓表」の読み下しを試み、「皆川弘道先生墓表」拓本の写真も紹介しました。その後、二〇一九年二月に、この第一回で配布した読み下し文と「皆川弘道先生墓表」拓本の原文を、周思敏さん（京都国立博物館学芸部アシエイトフェロー、当時）が入力し、ワード文書を作成して下さいました。

今回掲載する原文の翻刻は周さんの入力データに負うところが大きく、厚く御礼申し上げます。読み下し文は拓本の原文によって新たに全面的に改稿しました。翻刻文は改めて拓本の原文と照合点検し、句読点を打ち直しました。また、『事実文編 第二』（五弓豊太郎編、明治四十三年一九一〇刊）所載の訓読文「皆川弘道先生墓表 平戸侯松浦清」、および『京都名家墳墓録』（寺田貞治著、大正十二年一九二三再版）所載翻刻文を参照しました。

本稿の成るにあたって、松浦史料博物館の皆様には、底本とした拓本の調査（二〇一一年九月一六日、二〇一五年九月二六日）でお世話になり、このたび写真掲載を快諾していただきました。また、浜田秀先生（天理大学文学部教授）には多くのご教示を賜りました。心より謝意を表します。

令和三年（二〇二一）四月

松田 清

凡 例

- 1 翻刻文と読み下し文は上下二段に対照させた。翻刻文は段落に分け、段落ごとに読み下し文を対応させた。そのため翻刻文の段落間に空白を生じた。
- 2 翻刻にあたっては底本の白文に句読点を加え、漢字は可能な限り旧字体を用いた。原文の欠字（「先生」が続く）は無視した。読み下し文の漢字には通行の字体を用い、振り仮名を多くした。
- 3 現代語訳の段落は翻刻文・読み下し文の段落に合わせた。現代語訳は、適宜説明を加えた訳文とし、必要な場合には説明を「」内に示した。
- 4 原文の比喩的表現「啟聾發盲」（聾を啓し盲を発す）は作者の意図を離れて差別表現の疑いがある。しかし、歴史的文章であり、そのまま翻刻し、読み下した。現代語訳では原意をとって「門人の蒙昧を啓発し」と訳した。

皆川弘道先生墓表

みながわこうどうせんせいぼひょう
皆川弘道先生墓表

先生諱愿、字伯恭、皆川氏。號淇園、又號筇齋。生而穎異。四五歲能識字。其父試書杜甫秋興八首授之。不日成誦。自是而課讀書。一過便能記。

弟成章亦夙慧。其父常鄙世儒記聞之學、有明經弘道之志。而自顧年老莫復能焉。命二子學期必成。經史百家之書、凡可資聞見長學識者、無不隨需給之。當時耆宿、可以得啟發之益者、無不令交通往來。

成章每有所聞輒悟、不待語畢。而先生則如蒙蔽不通者、探源究委、輒作疑問。人莫之能辨、乃博涉古今之載籍。至于罕邁者、必極搜索、無所不窺。年甫十五、與成章覲韓客于城南、席上唱和。語出驚人、名馳海外。

先生諱は愿、字は伯恭、皆川氏なり。淇園と号し、又筇齋と号す。生れながらにして穎異。四五歳にして能く字を識る。其の父試みに杜甫の秋興八首を書し之を授く。日ならずして成に誦ず。是よりして讀書を課す。一たび過れば便ち能く記す。

弟成章も亦夙慧たり。其の父は常に世儒の記聞の学を鄙しみ、経を明らかにし道を弘むるの志有り。而して自ら顧うに年老いて復た能くする莫し。二子に命じて学の必成を期せしむ。經史百家の書、凡そ聞見に資し学識を長ずべき者は、需めに隨いて之を給せざる無し。当時の耆宿、以て啓發の益を得べき者は、交通往來せしめざる無し。

成章は聞く所有る毎に輒ち悟り、語の畢わるを待たず。而して先生は則ち蒙蔽にして通ぜざる者の如きは、源を探り委を究め、輒ち疑問を作す。人これ能く弁ずる莫ければ、乃ち古今の載籍を博渉す。邁うこと罕なる者に至りては、必ず搜索を極めて窺わざる所無し。

年甫めて十五、成章とともに韓客に城南に覲い、席上唱和す。語出でて人を驚かし、名を海外に馳す。

先生嘗以文示一老儒、其人爲竄改數字。就叩其義、則曰如此覺較優耳。不辨其故。先生私謂、不知字義、文固不可作、亦不能解。經之不明、職是之由。自是專潛意字書。而字書訓詁往往假借、不得其眞。乃類集古人用字之例、深思其理。疑竇稍通、又取諸象形、求諸聲音、乃始得口之所不能言者。於是悟名物之義本於聲音。

曰名生於聲、聲生於物。物生於天地陰陽、四時之有常者、統乎道德、貫乎性情、發乎聲氣、著乎民言。故易說卦傳曰、神也者、妙萬物而爲言者也。凡聖人之道、辨名爲要。名明則物察。物察則文義正當矣。易繫辭傳曰、夫易何爲者也。開物成務。又曰、開而當名、辨物正言。於是作朱墨籌、假之分彼我、立内外、玩索數年。

先生嘗て文を以て一老儒に示すに、其の人数字を竄改せんとす。就いて其の義を叩ぬれば、則ち曰わく、此の如き較優なるを覚ゆるのみ、と。その故を弁ぜざるなり。先生私に謂えらく、字義を知らざれば文固より作すべからず、亦解く能わず。經の明らかならざるは職として是に由るなり、と。是より専ら意を字書に潜む。而るに字書の訓詁は往々仮借にして、其の眞を得ず。乃ち古人の用字の例を類集し、其の理を深思す。疑竇の稍通ずれば、又諸の象形を取り、諸の聲音を求め、乃ち始めて口の言う能わざる所の者を得たり。是に於て名物の義の聲音に本づくを悟る。

曰わく、名は声より生じ、声は物より生ず。物は天地の陰陽、四時の常有る者より生じ、道德を統べ、性情を貫き、声氣を發し、民言を著わす。故に易の説卦伝に曰わく、神なる者は万物に妙にして言を爲す者なり、と。凡そ聖人の道は名を弁ずるを要と爲す。名明かなれば則ち物察かなり。物察かなれば則ち文義正当なり。易の繫辭伝に曰わく、夫れ易は何爲る者ぞや。物を開き務めを成すなり、と。又曰わく、開きて名に当て、物を弁じ言を正す、と。是に於て朱墨の籌を作り、之を仮りて彼我を分かち、内外を立て、玩索する

考易傳所言、法天地、列九疇、而八卦生焉。八卦成列、而四象生焉。統九疇之八卦、而以繫之於四象、而六爻生焉。擬議諸六爻、而以定其象、六十四卦成矣。

先生既知聲音本於易、以定音記象式之法。以是開名物之義。卽雖精微之極、亦可以得通曉焉。於是前所疑者、皆渙然氷釋矣。字義既通、文理始晰。以之讀古人之書、如揭白日而竝行。

成章已出嗣富士谷氏。亦推服終不可及。別治國史歌學、自作一家。

先生於是據開物之法、徵諸六經語孟左國等書、旁引會通、以審釋孝悌忠信仁義道德諸名物、作名疇六篇。又推字義而晰文理、逐章句而繹篇次、原述作之本旨、作易詩書儀禮戴記春秋語孟學庸繹解、凡數百萬言。率皆行於世。

而其於易用力最極矣。或思義而未得、則終宵不睡、晨起對机俟明。方食亦旁讀之。

こと数年なり。

易伝に言う所を考うるに、天地に法り九疇を列ねて八卦生ず。八卦は列を成して四象生ず。九疇の八卦を統べ、以て之を四象に繫けて、六爻生ず。諸の六爻を擬議して以て其の象を定め、六十四卦成る、と。

先生既にして声音の易に本づくを知り、以て音記象式の法を定む。是を以て名物の義を開く。即ち精微の極と雖も、亦以て通曉するを得べし。是に於て前に疑う所の者、皆渙然氷釈す。字義既に通じ、文理始めて晰かなり。之を以て古人の書を読まば、白日を掲いて並行するが如し。成章已に出て富士谷氏を嗣ぐ。亦推服するも終に及ぶべからず。別に国史歌学を治め自ら一家を作す。

先生是に於て開物の法に拠り、諸を六經語孟左國等の書に徵し、旁引会通して以て孝悌忠信仁義の道德、諸の名物を審釈し、名疇六篇を作す。又字義を推して文理を晰かにし、章句を逐つて篇次を繹べ、述作の本旨を原ね、易詩書儀礼戴記春秋語孟学庸の繹解を作すこと凡そ数百万言。率ね皆世に行わる。

而して其の易に力を用いる最も極まる。或いは義を思いて未だ得ざれば則ち終宵睡らず、

不覺食過度。必問侍人節量。門生來受教。
或與客語、未嘗移坐、人退則復讀如初。
是以奴婢掃其室、每無及其坐。一日伺其
不在、除臯比視之、厚席坳窳、色爲黯黑。
因徹厚席、牀已腐矣。其勤勉至于如是。

文化乙丑、買宅西鄰。與門人咨將勸學堂
以弘大斯道。聞者懽應、各捐財助工。經
年告竣。命曰弘道館。春秋祀先聖、講習
禮儀。

丁卯四月、病不食、尙且旦夕講學、率弟
子如平生。至五月十六日終于寢。親戚故
舊門人子弟、皆如喪父母。都下識與不識、
莫不歔歔惋惜。葬之日、遠近來會者亡慮
數千人。葬于京極阿彌陀寺先塋之側。私
諡曰弘道先生。

先生爲人溫厚沈毅。寬於容物、敏於行事。
事父母至孝、靡不承歡。其父晚年有風疾。
好遊覽、輻難出入。先生因告官造一車。

晨にも起きて机に對い明を俟つ。食に方りて
も亦旁之を読む。食の度を過ぐるを覚えず。
必ず侍人の節量を問う。門生来りて教えを受
く。或いは客と語るも未だ嘗て坐を移さず。
人退けば則ち復た読むこと初めの如し。是を
以て奴婢其の室を掃するも、毎に其の坐に及
ぶことなし。一日其の不在を伺い、臯比を除
き之を視れば、厚席坳窳して、色黯黒を爲す。
因りて厚席を徹けば牀已に腐れり。其の勤勉
是の如きに至る。

文化乙丑、宅の西隣を買う。門人と咨り將に
学堂を勸め以て斯道を弘大にせんとす。聞く
者懽び応じて各財を捐て工を助く。年経て竣
を告ぐ。命けて弘道館と曰う。春秋に先聖を
祀り、礼儀を講習す。

丁卯四月弟子病みて食せざるも尙且つ旦夕学
を講じ、弟子を率めること平生の如し。五月
十六日に至りて寢に終る。親戚、故旧、門人
子弟、皆父母を喪うが如し。都下識ると識ら
ざると、歔歔惋惜せざる莫し。葬の日、遠近
より来会する者亡慮數千人。京極阿彌陀寺の
先塋の側に葬むる。私諡して弘道先生と曰う。
先生人と爲り溫厚沈毅なり。物を容るるに寛、
事を行なうに敏。父母に事うる至孝にして承
歡せざる靡し。其の父晚年風疾有り。遊覽を

令人輓而行、躬自看護。母鹽釜氏嘗病。
先生侍養撫摩。母曰、吾病不足憂。唯恐
汝業有妨。願汝勤學。勿以我爲念。先生
亦不復強。

又友于兄弟、厚于姊妹。最與成章善。季
弟成均亦多才知名。然亦屢窮。先生每賑
之、以全友愛。二弟皆先亡。先生視諸姪
猶子。成均亡後、養其女爲子、擇配嫁之。

其遇弟子、威而不嚴、愛而不狎。務誘其善、
而戒其不善。自搢紳先生、學士大夫、至
閭閻芻牧之子、遇之無異。一室之內不迎
不送。非其義則雖權要弗屈。非其禮則雖
重幣請之弗往。王公大人待以師禮。朝貴
邦君、執弟子禮者多矣。登門籍者凡三千
餘人。其他自遠方托人通書以請誨者不可
勝紀。

先生旣以道自任。來者不拒、往者不追。

好むも輜かこにては出入しゅつにゅうし難がたし。先生因よりて官に
告つげ、一車いっしやを造る。人をして輓ひきて行ゆかしめ、
躬みづか自ら看護かんごす。母塩釜氏しおがま、嘗かつて病やむ。先生、
侍養撫摩じようぶます。母曰いわく、吾わが病やまいは憂うれうるに足た
らず。唯汝ただなんじが業ぎように妨さまたげ有らんことを恐る。願ねが
わくは汝勤學なんじんがくせよ。我を以て念ねんと爲なす勿なかれ、
と。先生も亦また、復またた強しいず。

又、兄弟けいていに友ゆうたり、姊妹しまいに厚あつし。最も成章と
善よし。季弟きていせい成均きんも亦多才たさいもて名を知らる。然しか
れども亦屢しばしば窮きうす。先生之これを賑にぎわす毎ごとに全まったき
友愛を以てす。二弟皆先にいていみなさきに亡ぼうす。先生諸姪しよてつを
視みる猶なお子のごとし。成均亡せいきんき後あと、其その女むすめを
養やしないて子と爲なし、配はいを拵えらびて之を嫁これとつががしむ。

其その弟子でしを遇ぐうするに、威いあるも嚴げんならず、愛
するも狎なれず。務つとめて其その善ぜんを誘さそいて其その不
善ぜんを戒いましむ。搢紳先生しんしん、學士大夫たいふより閭閻芻牧りよえんすうぼく
の子こに至いたるまで、之これを遇ぐうする、異ことにする無なし。
一室いっしつの内にありて迎むかえず送おくらず。其その義ぎに非あら
ざれば則すなわち權要けんようと雖いえども屈くつせず。其その礼れいに非あら
れば則すなわち幣ぬさを重かさねて之こを請こうと雖いえども往ゆかず。
王公大人おうこうたいじん、待まちつに師しの礼れいを以てす。朝貴邦君ちようきほうくん、
弟子でしの礼れいを執とる者多ものおほし。門籍もんせきに登のぼる者凡ものおほそ三
千余人。其その他遠方たえんぽうより人に托たくして書を通とほじ、
以て誨おしえを請こう者勝あげて紀しるすべからず。

先生旣すでに道みちを以て自みづから任にんず。來くる者は拒こほまず、

苟有善辭令至者、必待之以忠信。書牘往來、必手自報。燕居閒話、雖野翁邨嫗、莫不與語。談諧之際、必有所寓。與人君言必依仁、與人臣言必依義、與人父言必依慈、與人子言必依孝。片言隻語、益人匪少。而人多不自覺耳。

又常能恤患難、偕娛樂。不事妝飾、不立名節。毀譽之至、若蚊虻之過泰山。人譽之不能益其高。人毀之不能損其大。蓋其所養者有素也。性嗜酒、愛絲竹。而未嘗淫湎。

善書、最喜右軍。日必書數紙、畫則適意一掃。晚年書畫大進。遠近慕之、詣門徵請者不絕。率寄意遐邇。不肯以毀譽輕重爲趨舍。至于詩賦文章、心得手隨。所欲言者、下筆粲然成章。不復用力。是以著述極富矣。

先生實以享保甲寅十二月八日生、以文化丁卯五月十六日終。享年七十有四。娶松

往く者は追わず。苟くも辭令を善くして至る者あれば必ず之を待つに忠信を以てす。書牘の往来は必ず手もて自ら報ず。燕居閒話は野翁邨嫗と雖も与に語らざる莫し。談諧ぐ際、必ず寓する所有り。人君との言は必ず仁に依り、人臣との言は必ず義に依り、人父との言は必ず慈に依り、人子との言は必ず孝に依る。片言隻語も、人を益すること少からず。而して人多く自覺せざるのみ。

又、常に能く患難を恤み、娛樂を偕にす。妝飾を事とせず、名節を立てず。毀譽の至りも、蚊虻の泰山を過るが若し。人譽も其の高きを益す能わず。人毀も其の大なるを損する能わず。蓋し其の養う所の者、素有ればなり。性酒を嗜み糸竹を愛す。而も未だ嘗て淫湎せず。

書を善くし、最も右軍を喜ぶ。日に必ず数紙を書し、画けば則ち適意一掃す。晚年書画大いに進む。遠近より之を慕いて門に詣り徵請する者絶えず。率ね意を寄する遐邇なり。肯て毀譽輕重を以て趨舍を為さず。詩賦文章に至りては、心に得て手に随う。言わんと欲する所の者を筆に下せば、粲然として章を成す。復た力を用いず。是を以て著述極めて富めり。

先生實に享保甲寅十二月八日を以て生まれ、文化丁卯五月十六日を以て終る。享年七十有

平氏、繼娶小關氏。二男四女。男名允、承業。乃與親戚門人謀所以贊揚其德、遂樹碑勒實、以狀來乞銘。以余於先生有師弟義也。

嘗每東觀往來次浪華、必邀先生、宣昭義問、終日不輟。先生則諄諄誨之。厭而飫之、使自得之。其所說雖若迂回、其實直指正路、無不與道合者矣。吾儕小人、生今之世。幸使知其所踐履、與古之前言往行、竹帛所載者、猶畫一、日夜庶幾不能罷者、實是先生之賜也。靜夜思之、感激良深。乃作銘表其墓、曰、

魏魏叡嶽。天鍾其精、維降穎異。卓矣先生。命世作訓、網緼含英。早歲發憤、汲汲營營。靡言不誦、圖籍充盈。忘寢與食、學期必成。稽聖定則、用類其情。究原極委、用挹其清。理義奧蹟、既彰且明。道通千古、德順百行。匪爵之貴、匪祿之榮。如彼高山。望之崢嶸、毀而不損。無與人爭。乃育群材。啟聾發盲、臺臺勸誘、無

四。松平氏を娶り、繼いで小関氏を娶る。二男四女あり。男、名は允、業を承ぐ。乃ち親戚門人と其の徳を賛揚する所以を謀り、遂に碑を樹て実を勒さんとして、状を以て来り銘を乞う。余、先生に於て師弟の義あるを以てなり。

嘗て東觀往來し浪華に次る毎に、必ず先生を邀け、義問を宣昭にする、終日輟まず。先生則ち諄々として誨う。厭うて飫きれば自得せしむ。其の説く所は迂回するが若しと雖も、其の実正路を直指し、道と合わざる者なし。吾儕小人今の世に生まる。幸にも其の踐履する所と古の前言往行、竹帛に載する所の者とは猶お画一するがごときを知ること、日夜庶幾罷む能わざらしむるは、実に是れ先生の賜なり。静夜之を思えば、感激良に深し。乃ち銘を作り其の墓に表して曰わく、

魏々たる叡嶽よ。天其の精を鍾め、維穎異を降す。卓きかな先生。命世、訓を作し、網緼、英を含む。早歲に発憤し、汲々営々たり。言、誦せざる靡く、図籍充盈す。寢と食とを忘れ、学の必成を期す。聖に稽い則を定め、用て其の情に類う。原を究め委を極め、用て其の清を挹む。理義の奥蹟は、既に彰、且つ明なり。道は千古に通じ、徳は百行を順む。爵の貴き

匪忠誠。維此頑石、成瑤及瓊。終寬克裕。
以友弟兄。哲人已萎、不渝者名。末學誰
仰。憂心惇惇。丕昭懿度。以刊珉貞。垂
業不朽、孫子作禎。

に匪^{あら}ず、禄^{ろく}の榮^{はまれ}に匪^{あら}ず。彼の高山^{こうしん}の如^{ごと}し。之^{これ}
を望^{もち}めば崢嶸^{そうこう}として、毀^{こぼ}つも損^{そん}せず。人と争^{あら}
うこと無^なし。乃^{すなわ}ち群材^{ぐんざい}を育^{そだ}つ。聾^{ろう}を啓^{けい}し盲^{もう}を
発^{はつ}し、臺^び々^び勧誘^{かんすう}して、忠誠^{しゅうせい}なら匪^ざる無^なし。維^{これ}
此^この頑石^{がんせき}は、瑤^{よう}と成^なり瓊^{けい}に及^{およ}ぶ。終^{つい}に寛^{かん}にし
て克^{よく}く裕^{ゆう}。以^て弟兄^{ていけい}に友^{ゆう}たり。哲人^{てつじん}已^{すで}に萎^やむ
も、渝^{かわ}らざるは名^ななり。末学^{まつかく}誰^{たれ}か仰^{あお}がん。憂^{ゆう}
心^{しん}惇^{けい}惇^{けい}たり。丕^{おほ}いに懿^い度^どを昭^{あき}かにせん。以^て
珉^{びん}を刊^{きん}むに貞^{てい}たり。業^{ぎょう}を不^ふ朽^{きう}に垂^たるは、孫子^{そんし}
に禎^{さいわい}を作^なすなり。

文化五年戊辰冬十一月

文化五年 戊辰冬十一月

前平戸城主壹岐守源清拜撰

前平戸城主壹岐守 源 清 拜 撰

門人

膳所城主下總守藤原康禎拜書并題額

膳所城主下總守藤原康禎拜書并題額

孝子允謹建

孝子允謹建

現代語訳 皆川弘道先生墓表

先生は諱^{いみな}を愿^{げん}、字^{あざな}を伯恭^{はくきょう}という。氏は皆川氏である。淇園^{きえん}と号し、また筇^{きょうさい}斎とも号した。生れながらの英才であつた。四、五歳から文字をよく覚え、父親が試みに杜甫^{とほ}の秋興^{しゅうきやう}八首を書いて授けると、なんと、日もたたないうちに、暗誦^{あんじゆ}してしまつた。そこで父親は經典^{けいてん}の読書を課すことにした。先生は一度^{ひとたび}読み終えるや、たちまちよく記憶することができた。

先生の弟成章^{なりあきら}もまた、少年の頃から鋭敏であつた。父は日頃から、世間のはやり儒者の物知り学問を卑^{いや}しみ、聖人の教えを明らかにして世に広めたいという、明經^{めいけい}弘道^{こうどう}の志^{こころざし}があつた。しかし、考えてみれば、自分は年老いてしまつた、もうそれも叶わないと観念し、父は二人の子に命じて学問^{じやうもん}の成就^{じやうじゆ}を約束させた。そして、儒教^{けいしやう}の經書^{けいしよ}、史書^{ししよ}、諸子^{しよし}百家^{ひやつか}の書のうち、二子の見聞に役立ち学識を高めそうなものは、なんでも求めに応じ、買ひ与えないものはなかつた。また老大家で、教えを受けて啓発の益を得られそうな先生のもとには、必ず通わせた。

成章^{なりあきら}は人の話を聞きたびに、いつも悟りが早く、相手の語が終わるのを待たなかつた。それに対して、先生は人の話に蒙昧で意味の通じないところがあると、その原因を探り、細末まで詮索した。疑問を提出し、相手がよく答えられないと、古今の典籍を広く涉獵した。出逢うこと稀なものになると、かならず探索^{きわ}を極め、調べないものはなかつた。〔寛延元年一七四八〕年齢わずか十五歳で、成章^{なりあきら}とともに城南「実相寺」で朝鮮通信使に会い、席

上唱和して漢詩を応酬した。先生の繰り出す見事な詩語は通信使を驚かせ、才名を海外にとどろかせた。

先生がかつて、自分の書いた漢文の文章をある老学者に示すと、その人は数文字を書き改めようとした。そこでその理由を尋ねると、こうすれば少しよい文章になると思うのだ、とだけ言い、その理由を説明しなかった。先生がひそかに思うには、漢字の字義を知らなければ漢文を書くことはもとよりできないし、読解もできない。經典の意味が明らかでないのは、もっぱらこのためである、と。この時から、先生は専心字書を研究するこゝとなつた。ところが、字書に載せる漢字の注釈や解説は往々にして他からの借用であつて、真の意味を得ることができない。そこで、古人の文章から漢字の用例を収集し、漢字の原理を深く追求した。不明の疑問点がやや解けると、漢字のいろいろな象形を考察し、いろいろな声音を探し求め、口で言い表せないものを得た。こうして、名と物の原理は声音に本づくことを悟つた。

先生の言われるには、「名は声から生じ、声は物から生じ、物は天地の陰陽、春夏秋冬の四時が常に不変であることから生じ、道徳を統べ、人の性情を貫き、声気を発生させ、民の言葉を生み出すのである。その故に『易経』の「説卦伝」に曰わく、『神なる者は万物に妙にして言を為す者なり』と。したがつて、およそ聖人の道を知るには、名を弁明することが肝要となる。名が明かになれば物が察かになる。物が察かになれば文義が正しく当を得たものとなる。『易経』の「繫辭伝」に曰わく、『夫れ易は何為

る者ぞや。物を開き務めを成すなり』と。又曰わく、『開きて名に当て、物を弁じ言を正す』と」。

こうして先生は、朱墨の籌「陽籌と陰籌」を作り、これを利用して彼我を分け、内外を立て、考究すること数年に及んだ。

『易経』の伝「解説篇」の述べるところによれば、天地に法り九疇を列べて八卦が生ずる。八卦は列を成して四象を生ずる。九疇の八卦をひとまとめにして、これを四象に掛けて六爻が生ずる。もろもろの六爻を比較検討して象を定め、六十四卦が出来上がる、という。

先生は声音が易に本づくことを知ってしまったと、音記象式の法を定め、これを用いて、名と物の原理を解明した。すると、精微極まるものでも、これまた通曉することができた。こうしてそれまで疑問に思っていたものが、すべて明瞭に氷解した。字の意義が通じてしまうと、文の理が始めて晰かになった。この方式によって古人の書を読むと、まるで白昼太陽を頂いて並行するようであった。

成章は家を出て養子として富士谷氏を嗣いだ。先生を尊敬し従ったが、儒学で肩を並べるには至らず、別に国史と歌学を修め、自ら一家をなした。

先生はこうして開物の法に拠り、六経「詩経」「書経」「礼記」「楽記」「易経」「春秋」、『論語』『孟子』『左伝』『春秋左氏伝』『国語』等の書を調べてこの方法を適用し、用例を比較検討して、孝悌忠信仁義の道德、種々の名物を詳しく説明し、『名疇』六篇を著した。また、字の意義を究め、文の理を晰かにし、章句を検討して篇の順序を定め、著述の本旨にさかのぼり、『易経』『詩経』『書

經』『儀礼』『戴記』『礼記』『春秋』『論語』『孟子』『大学』『中庸』について、
繹解と題する注釈書を「漢文で」著した。合計数百万字。率ね皆、世に流布
した。

そして、先生の易への力の入れようは極端にまで達した。字義を考え続
けても得られないときは徹夜して眠らず、未明になっても床に入らず、起
きたまま机に向かって、夜明けを待った。食時の最中も易の書物を脇に置
いて、これを読んだ。気付かずに食べ過ぎることがあると、必ず付き人に
量を抑えるように頼んだ。生徒が来塾して教えを受けるときも、あるいは
来客と語るときも、いちども座を移さなかった。人が退室すれば、また再
び書を読むこと、元の通りであった。こうして、女中がその部屋を掃除し
ても、いつもその座にまで及ぶことはなかった。ある日のこと、先生の不
在を見計らって、虎の皮を取り除けた。見ると分厚い席が丸く凹み、色は
黒々としていた。そこで分厚い席を撤去すると、床はすでに腐っていた。
先生の勤勉ぶりはこれほどまでに徹底していた。

文化乙丑「二年一八〇五」、自宅の西隣の土地を購入し、門人たちと諮って、
そこに学堂を建て、大いに聖賢の道を広めようとした。これを聞いた者は
喜んで応じ、各自が賛助金を寄せて工事に協力した。年を経て学堂が竣工
した。名付けて弘道館といった。春秋の二回先聖「孔子および先哲」を祀る
奠の式を執り行い、礼儀を講習した。

丁卯「文化四年一八〇七」四月、病気で食事が取れなくなっても、なお朝夕、
講義を行い、弟子を指導すること、平生通りであった。五月十六日になり、

奥座敷で終わりを迎えた。親戚、旧友、門人子弟、皆、自分の父母を喪つたようであつた。都下面識のある者もない者も、嘆き惜しまない者はなかつた。葬式の日、遠方近在からの参会者は無慮数千人。京極阿弥陀寺の皆川家先祖の墓地の側に葬むつた。私に諡して弘道先生と言う。

先生は人と為り温厚沈着、意志の固い人であつた。物を受け容れるのに寛大であり、事を行なうのに敏速であつた。父母に仕えるのに孝行心がまことに厚く、欠かさず父母の歎びに応じた。先生の父親が晩年、中風を患つた。遊覧を好んだが、駕籠では往来が難しかった。先生はそこで役所に届け出て、一台の車を造り、人にそれを輓いて行かせ、自分はみずから父親を看護した。母は塩釜氏に生まれた。かつて病氣になった。先生が付き添つて孝養を尽くし慰撫すると、母親の曰わく、私の病氣は心配しないでよい。ただ、お前の学業の妨げになるのを恐れるばかりだ。お願いだから、お前は学問に励め。私のことは氣にするな、と。先生は再び無理を言うことはなかつた。

また、先生は兄弟の友愛を重んじ、姉妹を大切にした。弟の成章と最も仲良しだった。末弟の成均も、多才で名を知られた。しかし、しばしば生活に困窮した。先生はまつたき友愛の情をもつて、救援の手を差し伸べた。二人の弟は先に亡くなつた。先生が甥や姪たちを視るのは自分の子のようであつた。成均亡きあとは、その娘を養女として自分の子にし、相手を選んで嫁がせた。

弟子との応対には、威はあつたが、嚴はなかつた。愛情を注いだが、

なれなれしさはなかった。務めて弟子を善に導き、不善の行いを戒めた。高位高官や先生方、学者や諸家の家臣たちから、村里の草刈りや牛飼いの子に至るまで、応対を異にすることはなかった。一室の内に居たまま、迎えず送らずであつた。相手が義に反すれば、権力ある要人であつても屈しなかつた。非礼に対しては贈り物を重ねて招請されても往かなかつた。貴顕大官が師の礼をもつて先生を待ち受けた。公卿諸侯には、弟子の礼を執る者が多かつた。門人録に名の挙がる者はおよそ三千余人。その他遠方から人に託して書状を送り、教えを請うた者を残らず書き上げるのは不可能である。

先生は人の道を守ることを自任していた。来る者は拒まず、往く者は追わなかつた。礼儀正しい書面で「面会を求めて」来る者があれば、必ず忠信を以てその人を待った。書状のやりとりは必ずみずから手書して送った。くつろいだ世間話は田舎者の老翁老婆とでも共に語り合つた。談話が和やかになると、必ず寓意を込めて語った。諸侯との話には必ず仁を、諸家の家臣との話には必ず義を、人の父親との話には必ず慈を、人の子との話には必ず孝を、人や物に託して語った。片言隻語も、人のためになる所が少なくなかつた。しかし、相手は多くの場合、自覚しなかつた。

先生はまた、常によく人の患難を憐れみ、人と娯楽を共にした。装飾に念を入れることはなく、名誉や節操にこだわらなかつた。毀誉の激しい言葉にも蚊虻が泰山を過るように、聞く耳を持たなかつた。人の誉め言葉も先生の高潔さを増すことができず、人の貶し言葉も先生の偉大さを損なう

ことができなかった。そもそも先生には修養の素地があったからである。生まれつき酒を嗜み、管弦を愛した。しかし、いちども溺れたり乱れたりしなかった。

書を善くし、最も王羲之を愛好した。一日に必ず数紙を書し、画けば意のままに絵筆を走らせた。晩年に書画が大いに進歩した。遠方近在から先生を慕って訪問し、書画を乞う者が絶えなかった。強い関心を寄せるのは大抵はるか遠方の人々だった。決して毀誉輕重の評判によって相手を取捨選択しなかった。詩賦文章に至っては、心技自在であつた。言わんとする所を筆に下せば、そのまま粲然たる文章が出来あがり、再び力を込めなかつた。こうして著述は極めて豊富となつた。

先生は実は享保甲寅「十九年一七三四」十二月八日に生まれ、文化丁卯「四年一八〇七」五月十六日をもつて生涯を終えた。享年七十四歳。松平氏を娶り、ついで小関氏を娶つた。二男四女があつた。長男は名を允といい、家業を継いだ。そして、先生の遺徳をどのように称揚するか親戚門人と相談し、碑を建て行実を刻むことにして、書状をもつて碑銘を乞うて来た。余が先生と師弟の関係にあるためであつた。

かつて参勤交代の往来で浪華に滞在するたびに、必ず先生を「藩邸で」待ち受け、礼を尽くして公明正大に問い、終日止むことがなかつた。先生は懇切丁寧に教えた。気が進まず飽きると自得させた。先生の講説は迂回しているようにみえるが、実は正しい進路を直指し、先聖の道と合わないものはない。我々小人が今の世に生まれながら、幸にも、自分の日頃の実践

と古人の名言徳行、聖賢の典籍が記載する所とは分け隔てがないことを、日夜ほとんど止むことなく思い知らされている。これはまことに先生の賜^{たまもの}である。静かな夜にこれ을 思えば、感激、真に深いものがある。碑銘を作り、先生の墓に掲げて曰わく、

魏々^{ぎぎ}たる比叡^{ひい}の山よ。天はその精を鍾^{あつ}め、ここに穎異^{えい}の人を降^{くだ}した。先生のなんと高邁なことか。一世^{ひい}に秀でて人を教えた。天地の元氣を受け、その精華を身に付けた。早年に發憤し、汲々^{きき}と学習した。古人の言はすべて暗誦し、室内は書籍充滿。寢食を忘れ、学の必成を期した。聖人に問ひ學則を定め、聖人の心情に従った。本^{もと}を究^{きわ}め末^{すえ}を極^{きわ}め、その精髓を汲み取った。物の道理の深奥は、すでに明々白々である。道は千古を通じて変わらず、徳は百行^{ひやっこう}を治め導く。爵位があるからといって貴^{たつと}くはない、禄があるからといって譽^{ほま}れではない。かの叡山のごとく、望めば高く險^{けわ}しく、毀損しようとしてもかなわない。先生は人と争うことがなく、沢山の英才を育てた。門人の蒙昧を啓發し、勧誘に努めて倦^うまなかった。教育に忠誠を尽くした。大抵の原石は「先生のもとで玉^{たま}の」瑤^{よう}となり瓊^{けい}にまでなった。先生はついに寛大で実にゆつたりとした性格となり、兄弟の友愛を重んじた。哲人は死んでしまっても、変わらないのはその名である。浅薄な学者の誰が仰ぎ見るのか。憂い深く心が晴れない。先生の度量の大いさを天下に明らかになしう。碑銘^{きぎ}を刻む墓石は実に美しく見事である。ここに先生の業績を後世不朽に伝えることは、子孫の幸せとなる。

文化五年「二八〇八」戊辰冬十一月

門人

前平戸城主壹岐守源清拝撰

膳所城主下総守藤原康禎并題額

孝子允謹建

(松田 清訳)